

青森大学附属総合研究所

総研だより

第6巻 第4号 2025年3月31日

◇目次

1. 2時間で歩いて回れる青森市内文学散歩
社会学部 飛内 文代 …… 1
 2. 論理はシステムに勝てない 社会学部 金 二城 …… 8
 3. SDGs 研究センター報告 SDGs 研究センター長 藤 公晴 …… 11
 4. 2024年度 比較環境思想研究センター 報告
比較環境思想研究センター長 関 智子 …… 16
 5. Café 総研実施報告 青森大学附属総合研究所事務局 …… 18
- ▼総研日誌 …… 21
- ▼編集後記 …… 21

1. 2時間で歩いて回れる青森市内文学散歩

社会学部 飛内 文代

1 はじめに

本稿は、社会学部の2年ゼミ、コミュニティ基礎演習Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）での実践をベースにしたものである。

この授業では「青森の文学を体験する」をテーマに、Ⅰ・Ⅱとも各1～2回文学散歩を実施してきた。地域に素材を求めること、経費と時間的負担が少なく参加が容易であることを重視し、180分（授業2コマ）か150分（昼休み+1コマ）で、大学から往復できるコースを作成、実施している。

結果として、大学からの移動時間を除けば、ほぼ2時間で歩いて回れる青森市内の文学散歩コースが複数できた。以下に紹介するのはそのうち、今年度実施したものである。

2 青森駅界隈文学散歩

(1) ルート

青い森公園 — 1.4 km → 青森駅 — 1.0 km →
青い海公園・聖徳公園 — 0.6 km → 常光寺 —
0.4 km → 善知鳥神社 — 0.4 km → 青い森公園
往復 3.8 km

(2) 青い森公園

現在青い森公園となっている場所には、1952年から1981年まで青森県立中央病院があった。ただ、その痕跡を探すのは難しい。

県庁通りの交差点を北に向かうと、県庁北棟の脇に青森県立図書館の図書返却用ブックポストがある。1994年までここには県立図書館があった。

県立図書館は、1928年に開館。1945年7月の青森空襲で焼失し、翌年10月に新築開館したものの、

11月に火災で再び焼失。1947年によろやく再開館した。

1949年、寺山修司は、大叔父に引きとられ、青森市立野脇中学校の2年に転入した。ただ、夏休み頃まではあまり登校していなかったと同級生は言う。その頃の寺山もここにあった図書館を利用していたのだろうか。青森市荒川に移転した現在の県立図書館には、寺山自身から寄贈された第一作品集『われに五月を』の初版本（1957年・作品社）が所蔵され、実際に手に取ることができる。

(3) 青森駅周辺

新町通りを青森駅に向かって進み、駅前で右折。A-FACTORYを過ぎて、ベイブリッジの下をくぐると、青函連絡船の姿が見えてくる。

① 青函連絡船戦災の碑

青函連絡船青森栈橋可動橋跡に、青函連絡船戦災の碑がある。この碑は、2005年に青森戦災・空襲60周年事業実行委員会によって建てられた。

1945年7月14日～15日、アメリカ軍の攻撃により青函連絡船4隻が次々と撃沈され、424名が



図1 青函連絡船戦災の碑

死亡。8月10日には青森湾内で1隻が沈められ、131名の死者を出している。この結果、本州と北海道を結ぶ大動脈が断たれ、物流はストップした。

太宰治の『ヴィヨンの妻』の初版本（1947年・筑摩書房）には、版は全く同じだが、印刷所が「東京」のものと「北海道」のもの2種類がある。これについて、筑摩書房に問い合わせたところ、社史を調べてくださった。

当初『ヴィヨンの妻』はあまり売れていなかったが、翌年太宰の死が報じられると、注文が殺到。増刷したくとも当時はまだ紙不足で、紙の取引も制限されていた。ところが、物流が停滞したことによって北海道にはまだ紙が残っていた。これを知った筑摩書房は、『ヴィヨンの妻』の版下を北海道に送って印刷したのだという。

連絡船被災の影響はこんなところにもあった。

② 青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

青函連絡船は1908年に就航。青函トンネルの開通によって1988年に廃止されるまで、80年間に渡り本州と北海道を結ぶ主要な交通手段であった。

メモリアルシップ八甲田丸には、運行当時の様子を伝えるさまざまな展示がある。

三浦哲郎の「みちづれ」には、廃止直前の青函連絡船を舞台に当時の様子が描かれる。

「広い連絡船の待合室には、立ち食い蕎麦の出汁の匂いが籠っていた。色とりどりの椅子席は相変わらず閑散としていて、栈橋や港の見える窓際だけがわずかに賑わっていた。身軽な防寒服の男たちが十数人もずらりと並んで、手に手に重そうなカメラを構えている。背後から覗いてみると、着いたばかりの連絡船がタグボートに押されながら向きを変えるところで、窓の正面に船首がくるとシャッターの音が高まった。

この連絡船の航路は、あと一と月足らずで廃止されることになっている。海峡の下をくぐり抜けるトンネルが完成したからである。」

～『完本 短篇集 モザイク』（2010年 新潮社）～

三浦哲郎は毎年3月に青函連絡船に乗った。19歳で亡くなった姉貞子を弔うためである。1937年3月16日、哲郎の6歳の誕生日に、貞子は1通の手紙を投函し、青函連絡船に乗ったことまではわかっている。津軽海峡に身を投じたと思われたが、遺体はあがらなかった。この姉のことは、他にも長編小説『白夜を旅する人々』や「春の夜航」「姉はイルカに乗って」など多くの作品に登場する。

実際に青函連絡船のデッキに出て海面を眺め、さらにブリッジや煙突まで登ってみると、作品の世界が現実味を持って迫ってくる。

学生たちが驚くのは、船の1階の車両甲板に貨車や列車がそのまま積み込まれていること。

青森駅構内に栈橋が設けられたのは1898年。その後第一次世界大戦（1914～1918）の影響を受けて貨物輸送が急拡大したため、連絡船にレールを敷き車両をそのまま積み込めるようにした。1925年から本格的に運行されたもので、積み込みのための可動橋・可動扉なども珍しいものだそうだ。

③ 津軽海峡冬景色歌謡碑

八甲田丸を降りると、すぐ傍に津軽海峡の波をイメージしたデザインの碑が見える。

石川さゆりの代表曲「津軽海峡冬景色」の歌碑である。建立は1995年。碑面には歌詞が、碑陰には建立のいきさつが記されている。ただ、2000年代生まれの学生たちには、なぜここに碑があるのかピンとこないようだ。「歌は世に連れ、世は歌に連れ」である。なお、以前は碑の前に立つと人感セ

ンサーで 2 番の歌が流れていたが、現在は手動でボタンを押すと流れるようになっている。

(4) 青い海公園

可動橋の前から、海上の遊歩道のラブリッジを渡り、アスパムに向かう。海側に広がっている青い海公園を東側に進むと、大町桂月の碑がある。



図 2 大町桂月 碑

この碑は、青森県文化観光立県宣言並びに青森の市政 100 周年、そして大町桂月の来県 90 周年を記念して、1998 年に建立された。碑面には、「大町の桂の井戸の水を清み さやかにやどる 秋の夜の月」という歌と紀行文の一節、碑陰には建立の説明が刻まれている。

紀行文は、「陸奥の海岸線」の一節で、大町の桂井旅館に宿泊し、自分の名前との類似に驚いたエピソードがユーモラスに語られている。

大町桂月（1869～1918）は高知県生まれの文人である。東京帝国大学在学中から論説・批評・紀行・詩歌など多くの文章を発表し、注目を集めた。1908 年に初めて十和田湖を訪れた。1922 年に再び来県。青森県内を周り、蔦温泉を愛し、移住し、1925 年 56 歳で亡くなった。墓も蔦温泉にある。なお、大町桂月の文学碑は青森県内に 42 基あり、青森県で最も文学碑の多い文人である。

(5) 聖徳公園

青い海公園を東に出るとすぐ聖徳公園に続く。いくつかのモニュメントや記念碑がある。ここには浜町埠頭があり、1986 年に明治天皇が来県したことを記念し、1930 年に「明治天皇御渡海記念碑」が建立された。この巡幸が「海の記念日」の由来となっているため、それを記念した碑もある。

文学碑としては弥富破魔雄の明治天皇の業績を称えた歌碑がある。弥富破魔雄（1878～1948）は、熊本県出身の国文学者で、昭和天皇の傅育官を務め、旧姓弘前高等学校では太宰治の担任であったという。

(6) 常光寺

柳町通りを南に向かい、新町通りとの交差点を寺町方向に渡るとまもなく常光寺がある。現在駐車場となっているところの前に、案内板がある。

1923 年、旧制青森中学校に入学した太宰治が下宿した豊田家のあった場所である。太宰はここから、当時合浦公園の近くにあった青森中学校に通った。「思い出」の中では次のように語られる。



図 3 太宰治下宿あとの案内

「いい成績ではなかったが、私はその春、中学校へ受験して合格をした。私は、新しい袴と黒い沓下とあみあげの靴をはき、いままでの毛布をよして羅紗のマントを洒落者らしくボタンをかけず

に前をあけたまま羽織って、その海のある小都会へ出た。そして私のうちと遠い親戚にあたるそのまちの呉服店で旅装を解いた。入口にちぎれた古いのれんをさげてあるその家へ、私はずっと世話になることになっていたのである。」

～『晩年』(1947年・新潮文庫)～

(7) 善知鳥神社

再び交差点を戻り、新町通りに入る。次の交差点を右折すると善知鳥神社がある。

善知鳥神社の歴史は古く、平安時代の坂上田村麻呂にまで遡るといふ。境内には謡曲「善知鳥」の碑、菅江真澄(1754～1828・江戸時代の学者)の句碑など複数の碑がある。

① 松尾芭蕉の句碑

碑面には「名月や 鶴脛高き 遠干潟」の句が刻まれているが、かなり読みにくい。

建立は1812年と古く、建立のいきさつはよく分からない。

② 増田手古奈の句碑

碑面は「みちのくの 善知鳥の宮の 小町草」。1985年、十和田青森俳句会が建立。

増田手古奈(1897～1993)は、大鰐町生まれの医師・俳人。東京帝国大学在学中から高浜虚子に俳句を学び、郷里に戻ってからは俳誌「十和田」を主宰した。「十和田」は60年にわたり、734号まで刊行された。手古奈は青森県内に30基以上の句碑が建立されており、大町桂月に次いで多い。

善知鳥神社の池に沿って進み、左折すればもう青い森公園に戻ってくる。

このコースを逆に回ってもよい。時間にゆとりがあれば、ねぶたの家ワ・ラッセ、青森県観光物産館アスパム、新しくなった青森駅に移転した青森市民美術展示館などにも立ち寄れるし、アウガ6階・7階の青森市民図書館で、実際の本にも触れられる。

ただ、この界隈は青森空襲でほぼ焼失したため、太宰が暮らした当時の建物などは残っていない。

3 合浦公園界隈文学散歩

(1) ルート

合浦公園正門 → 松尾芭蕉句碑 → 日本プロ野球初の完全試合達成記念碑 → 石川啄木歌碑 → 青少年健全育成祈願碑 → 西門 → 旧制青森中学校校舍跡地の碑 → 合浦公園正門

往復 2.1 km

(2) 合浦公園

合浦公園は、1882年に水原衛作によって計画され、弟の柿崎巳十郎とともに私財を投じ市民の協力も得て、1894年に完成し、市に寄付された。市街地には珍しい海浜公園として知られ、園内には31基の石碑がある。

青森市出身の方言詩人高木恭造はこううたう。

春^{ハル}先^{サキ} 一合浦公園一
松^{マツ}ばり^オ生^ナえだこの公園地^ツア^{エバダ}妙^{サビ}ネ淋^{サネ}サネ
女^メ子^コ供^ゴの影^{カゲ}も見^ミねし
海^{ウミ}辺^ヘサ出^デはれば東^{キタ}風^{カゼ}ア強^{ツヨク}ぐ
ラムネ^{ラムネ}の味^{アジ}コア何^{ナニ}時^{トキ}ま^マでも舌^{シタ}サ残^{ノコ}て
壊^{クワ}れた腰^{カシ}掛^{カケ}で友^{トモ}のしゃべ^{イロ}る情^{シヨウ}話^{ワザ}ア
たワエなぐ飛^{トビ}ばされ^{サレ}でまら^マネ

～『まるめろ』(1931年・「北」編集所)～

(3) 松尾芭蕉句碑

入口からすぐ右に曲がり、管理棟の建物を過ぎると稲荷神社がある。その前に浅田祇年と松尾芭蕉の二つの碑が並んでいる。

浅田祇年（1812～1896）は、青森に生まれた江戸から明治期の俳人。

碑には「義経の夏こもり處や外はかま」と刻まれ、建立は1894年。

その隣が松尾芭蕉の句碑。碑面に刻まれているのは、「鎌倉を生きて出でけんはつ松魚」

碑陰から松尾芭蕉の200年祭を記念し有香社が1892年に建立したことがわかる。この有香社を創設したのが浅田祇年である。

ようやく読めた句碑の周りでは

「芭蕉は青森まで来てたっけ？」

「松魚って何？ え、鯉？」

「陸奥湾で鯉は捕れないよね」

次々と出る学生たちの疑問。そこで一言。

「調べてレポートに書こう！」

(4) 日本プロ野球初の完全試合 達成記念碑

入口の方向に戻り、野球場に向かう。すぐに大きな碑が見える。

碑面には「ここ青森市営野球場において 日本プロ野球史上 初の完全試合が達成された」とある。碑陰には、この碑が1994年の合浦公園100周年を記念して建立されたことが記されている。

寺山修司は「わが町」でこう紹介する。

「ジャイアンツの藤本英雄投手が、青森市営球場でパーフェクトゲームをやったのは、私が少年ジャイアンツの会青森支部で「委員」をやっていた頃であった。

相手は監督小島利男率いる西日本軍で、藤本のスライダーに手も足も出なかったのだ。「けちでち

っぼけな町のけちな野球場」で、わが国で初めての大記録が立てられたことが私には嬉しかった。」

～『誰か故郷を思はざる』（1968年・芳書店）～

(5) 石川啄木歌碑

通路に沿って北に向かうと間もなく海が見えてくる。波打ち際を右手に見ながら松林の中を進むと、合浦公園で最も有名な石川啄木の歌碑がある。



図4 石川啄木歌碑

碑面

啄木

船に酔ひてやさしくなれる

いもうとの眼見ゆ

津軽の海を思へば

光書

碑陰

石川啄木が石をもて追われる如く故里を出て妹光子と共に津軽海峡を渡ったのは明治四十年五月四日であった。

この歌碑は青森県啄木会が青森市その他の協力を得て青森県啄木歌碑建設委員会をつくり昭和三十一年五月四日に建てたものである

この短歌は、啄木の歌集『一握の砂』に収められている。1907（明治40）年、啄木が青森から函館へ向かう船の中での体験を詠ったものである。

1907年、21歳の啄木は、洪民尋常高等小学校の代用教員を免職され、知人を頼って函館で働こうと決めた。当時、父一偵は野辺地町の常光寺に身を寄せていた。啄木は、母を洪民村に残し、妻子を盛岡の実家に預け、5月4日、妹の光子とともに好摩駅（岩手県玉山村、現盛岡市）から列車に乗った。夜の9時半頃青森駅に到着し、陸奥丸に乗船したが、出港が遅れ、函館に着いたのは5日であったという。

「光書」とあるように、碑面の歌は妹光子が書いたものである。碑の除幕式には、光子とその家族も臨席した。

青森と石川啄木の繋がりを示す碑である。

（6）青少年健全育成祈願碑

海から離れ、西門へ向かうと、茶室・和室を備えた合浦亭がある。その北側に円い枠の中に立つように見えるのが棟方志功の碑である。

1963年に青森青年会議所が建立したもので、棟方自身の筆で、「清く高く 美事に 希望の大世界を進み抜く」と記されてある。

棟方には「合浦浜 松原添えの 砂丘に ふるさとの花 玫瑰の花」という歌があり、志功はこの歌を、いくつもの作品にしている。

（7）旧制青森中学校校舎跡地の碑

西門を出て、道なりにテニスコートの方へ向かう。気をつけないと見過ごしてしまうが、スポーツハウスの入口近く、生け垣に隠れるように、旧制青森中学校校舎跡地の碑が建っている。

碑面には校歌旧制青森中学校校歌が、碑陰には、創立85周年を記念して建立されたことが記されている。

碑面 校歌

無限の徽章中字形
かざす青森中学生
高き理想は千秋の
雪を戴く八甲田
清き希望は萬丈の
碧波を畳む青森港

旧制青森中学校

は、1912年から1945年7月28日に青森空襲によって消失する

までここにあった。1923年から1927年まで、太宰治が通学していたのもここで、「思い出」の中では次のように描く。

「校舎は、まちの端れにあって、しろいペンキで塗られ、すぐ裏は海峡に面したひらたい公園で、浪の音や松のざわめきが授業中でも聞えて来て、廊下も広く教室の天井も高くて、私はすべてにいい感じを受けたのだが、そこにいる教師たちは私をひどく迫害したのである。」

～『晩年』（1947年・新潮文庫）～

現在の青森高等学校は青森市桜川にあるため、もちろん「波の音」は聞こえない。青森県近代文学館に勤務していたとき、太宰治ファンから、「太宰が卒業したという青森高等学校に行ってみたが、『思い出』の記述とは随分違う。あれは太宰の創作ですか？」と聞かれたことがある。これもまた実際に足を運んだからこそ生まれる疑問であろう。

後は、西門から正門へ戻るだけだが、もう少しだけ足を伸ばすと、青森市民体育館（カクヒログループスタジアム）の裏には「青森県立商業学校



図5 旧制青森中学校校舎跡地の碑

跡地之碑」があり、「合浦の公園浪打つ岸に 商業学校基を置きぬ」と土井晩翠作詞の「青森商業学校校歌」の一節が刻まれている。この校歌は、現在も県立青森商業高等学校の校歌として歌い継がれている。

現在は青森市戸山にある青森商業高等学校だが、1911年から1945年の青森空襲で焼失するまでここにあった。その後いくつかの校舎を経て、1971年に同市東造道に移転した。だから戸山に移る2017年まで「浪打つ岸」に近い場所にあったわけである。ただ、その間もいくつかの施設が合浦にあり、1985年の創立80周年を記念して、この碑が建てられた。

なお、土井晩翠が作詞した青森市内の学校の校歌はもう一つある。1909年に制定された青森県師範学校（現弘前大学教育学部）の校歌である。青森市花園2丁目児童遊園地にある「青森師範学校之碑」に校歌が刻まれている。

4 おわりに

今回取り上げたのは、青森市民には身近なところばかりである。しかし、そこにある碑に目をとめることは少ないだろう。

これまで文学碑調査や文学散歩を行ってきた中でも「毎日通っているのに見たことがなかった」「地元なのに知らなかった」「なぜここにこんなものがあるのか」といった感想を持つ学生が多かった。

コミュニティ基礎演習Ⅰ・Ⅱでの文学散歩の成果は、各自がレポートとしてまとめ発表した。特に3で紹介した合浦公園については、ポスターを作成し、大学祭でも展示した。

青森には興味深い素材がたくさんある。それを見直し、活用する方法として、手軽な「文学散歩」を紹介した。青森市内のそぞろ歩きの参考にできれば幸いである。

今後は、学生の出身地や既習事項、これまでの体験を勘案して、さらに充実させていきたい。

参考資料

1. 鈴木廣 『青森県文学碑散歩』1997年・青森県教育厚生会
2. 青森県近代文学館 「特別展 青函を旅した文人たち」図録・2016年
3. <https://park-mente.jp/park/gappo/>
4. <https://aomori-hakkoudamaru.com/>

2. 論理はシステムに勝てない

社会学部 金 二城

▽伝統環境思想の可能性と限界

筆者は去年、韓国環境哲学学会誌に「日本の伝統環境思想の示唆点—江戸時代を中心に」という論文を掲載した(金、2024)。その論文では、日本の伝統環境思想研究の始まりと、主な動向、そして江戸時代の環境思想家といわれている熊沢蕃山と安藤昌益の環境思想を紹介し、その特徴と示唆点を論じた。最後に伝統環境思想を現代社会に取り入れるための課題も提案した。

示唆点としては、伝統環境思想が実践的であること、人物中心であること、韓国と共通点が多いため、韓国でも積極的に伝統環境思想の研究が必要であることなどを挙げた。最後に現在の環境哲学、環境倫理の限界を克服するための伝統環境思想の可能性に注目する必要性と、今後の課題として、アジアでの伝統環境思想の体系的な研究とその結果が共有できる自律的な学習の場が必要であること、東洋の独創的な自然に対する内面的な価値を探求する努力が必要であることを提案した。

その際、今後の伝統環境思想研究のための提案など結論を整理するための文献を調べるなか、基本的に東洋の伝統思想の現代社会へ適用は限界があるとの主張があった。その理由としては、東洋の伝統価値である地位、新面、温情、便宜、閉鎖などは資本主義に受け入れがたいことが指摘されていた(ソン、2003)。筆者はこの主張は妥当で、伝統思想の限界を理解させる内容であり、もっと具体的に考慮する必要があると考えた。そのため、論文の結論に“論理はシステムに勝てない”とのテーゼを提示した。ここでいう論理は伝統環境思想であり、システムは現代社会そのものを意味する。

このテーゼは論文の結論で提示したので、その妥当性についての論証はできなかった。よく考えてみると、このテーゼは具体的に論じてみる価値があると思われる。もしこのテーゼが妥当であれば、伝統思想など新しい論理を主張し、それを現代社会に普及するためには、論

理性だけではなく違う戦略も必要であることになる。このテーゼを前提にすると、論理は必要条件にはなれるかもしれないが、十分条件にはなれないことを意味するからだ。そうすると、東洋の伝統思想は生態中心的で、我々になじみぶかい思想で、今日の環境問題の解決のため必要であるが、その限界も明確になる。

それでは、このテーゼの妥当性はどのように論証できるだろうか。それは、ある主張が論理的に妥当であっても、それだけでは(社会)システムに受け入れられない根拠を示すのがその一歩になれるだろう。要するに、社会システムの問題、特徴などを理解したうえで、論理性だけではシステムには受け入れられない根拠を探して提示する必要がある。その限界を理解したとき、今後の対策も考えられるのではないだろうか。

▽社会システムの特徴

ここでいうシステムは社会システムを意味すると上述した。社会システムは、社会を説明するための概念、理論であり、社会実在論がその出発点であるといわれている。学問が成立するためには、その学問の固有の主題が必要で、社会学の場合は社会の秩序がいかに可能かを問う学問で、パーソンズはこれを「秩序のホブズ問題(Hobbesian problem)」と捉えた(大澤、2019, p.386)。社会秩序を理解する方法としてミクロ社会学とマクロ社会学がある。後者である社会システム論の主題は、社会全体の理解、分析である。もちろん社会の構成要素である個人も主な分析対象であるし、それはミクロ社会学である。個人の分析だけでは社会の現象、仕組みを説明できない部分も多いので社会全体を把握できるマクロな観点が必要になってくる。しかし、マクロレベルの社会全体を認識、理解するには人間の認識能力には限界がある。そのため考えられるのが、社会を単純化、モデル化した社会システム(論)である。富永は、“社会システムとは、マクロ的全体としての社会についてたてられたモデル、すなわち諸部分

間の関係および諸部分と全体との関係に着目するという方法原理にもとづいて構築された社会についてのモデルである”と定義している(1995, p.89)。

このような観点からみると社会システム論は社会を簡素化したもので、実際社会の構造の理解に役に立つ理論である。本稿の目的である現代社会がどのような仕組みなのかを把握するためには社会システムのモデルをみる必要があるといえよう。それでは、社会システムモデルにはどんなものがあるだろうか。富永は、四つの社会システムモデルとして、1.機能分析のモデル、2.相互依存分析のモデル、3.システム-環境分析モデル、4.システム変動分析モデルを抽出して提案している(1995,p.101)。この原稿の目的である社会の仕組みを理解するために、構造-機能モデルともいわれている機能分析モデルに着目してみよう。繰り返しになるが、この原稿の目的は社会の仕組みを理解して、それが論理性だけでは受け入れられない根拠を探索してることである。機能分析モデルは社会を説明する主な理論であるし、社会システムの主な構成要素と特徴がふくまれているため、その仕組みを明らかにするにはまず十分であるといえよう。

構造-機能分析モデルは社会を構造と機能で説明しようとする理論で、パーソンズによって具体化された。構造と機能を組織で考えると構造は部署であり、機能はその部署の役割と考えてもよいのではないだろうか。大澤(2019)によるとここでいう構造とは会社の組織図のようなもので、構造-機能理論は相互連携と機能評価という二つの分析をつづけて説明する理論で、要約してみると次のような内容である。相互連携は要素(変数)の間にどのような関係があり、どのような影響をおよぼしているのかに関する相互関連論である。機能評価は、相互関連の結果がシステムの目的である機能的要件の達成にどれだけ役に立つのかに関する解釈である(p.409)。各組織にはその目的があるようにシステムにも目的があり、それが機能的要件であるといえよう。構造-機能システムにおいては、システムを構成している変数の一部が定数化されてあらわされ、この部分はシステムの構造と呼ばれるし、動的要素はシステムの

機能であり、それらの相互依存をつづけて、システムは均衡状態になる(富永、1995, p.118)。

社会システムで共通するのは、各システムはその構造と機能があり、それらは社会の目的である機能的要件への貢献が重要であることだ。機能的要件についてもう少し具体的にみてみよう。機能的要件をまとめたのがパーソンズ AGIL 図式である。よく知られているように AGIL とは、適応 adaptation, 目標達成 goal-attainment, 統合 integration, 潜在的パターン of the maintenance of latent pattern maintenance の頭文字である。以上の四つの機能的要件はどのシステムでも見られるし、各システムではこれらが満たされなくなった場合そのシステムは維持できなくなる(富永、1995,p.180)。システム論から考えてみると社会はシステムであり、その中の秩序が維持される理由は、諸部分と要素がシステムの維持のための役割をはたしているからである。社会システムは構造と機能でなりたっているが、その構造と機能の主な役割は社会システムの維持である。

▽社会システム論からの限界とヒント

このような観点から考えてみると、ある論理がどのようにシステムに受け入れられるかについて考えてみることができる。それは、ある論理があるシステムに受け入れられるか否かは、論理性より、そのシステムの機能的要件であるシステムの目的と整合性があるかどうかの問題だといえる。繰り返しになるが、社会システムの主な目標はそのシステムを維持することであり、システム内部の構造と機能はそのシステムの維持に貢献できるかどうかでその効用が判断される。これに関して大澤は、システムはアイデンティティといえる統一性をもっているし、システムの個々の要素の「機能」は、そのシステムの維持に貢献をしているかが重要であると説明している(大澤、2019, p.398)。

現代の社会システムは、四つのサブシステムである経済、政治、狭義の社会、狭義の文化で構成されており、それは上述したパーソンズの AGIL に基づいている(富永、1990,p.31)。伝統環境思想が現在の社会シ

システムに受け入れられるためには、四つのサブシステムとの整合性が必要だし、コンフリクトがあってはならない。しかし、例えば、現在社会の根幹である経済的サブシステムで重視する価値は資本主義精神である点(富永、1990, p.195)を考慮すると、伝統環境思想の受け入れ可能性はかなり低くなると思われる。周知のとおり資本主義での自然に対する価値は道具的であり、人間中心主義に基づいているからだ。以上のような社会システムの特徴から考えると、“論理はシステムに勝てない”というテーゼは妥当性があるように思われる。

それでは社会システムには新しい価値、論理が取り入れられる可能性ないだろうか。幸いなことにシステム論には限界だけではなく、その可能性も垣間見えるといえよう。一つの可能性は、社会システムは有機体システムと違い、その構造と機能が変動可能であることだ。有機体のアナロジーからも影響を受けたのが社会システム論であるが、攪乱されてその構造が維持できない場合死に至る有機体システムとちがひ、社会システムの場合構造変動をつうじて新しい均衡をつくりだせると説明されている(富永、1995, p.119)。

それでは社会システムの構造と機能を変えるためにはどのような方法があるだろうか。基本的には社会の目的である機能的要件を変える必要があるが、それはまだ定かではないようだ。例えば大澤は、特に構造—機能分析は社会変動を説明できないとし、それは社会システムの機能的要件がどのように変化するかについて十分に検討されてないからだと指摘している(2019, p.423)。しかし、富永のシステム変動分析モデルでの次の説明には論理がシステムを変えられる一つのヒントがあるのではないだろうか。

もし彼らの大多数が現行の構造はうまく機能していないと判断し、現行の構造に不満足であるなら、そのことは現行構造を変えようとする強い力がシステム内部から出てくることを意味する。(中略) こうしてシステム内にシステムの構造を変動へと導こうとする力が発生し、それはいったん発生するとつぎつぎに増幅されていって、最終的には構造変動が実現されることになるであろう(1995, p.216)

以上、大まかではあったが、論理がシステムに勝てない根拠について、社会システム理論の特徴を中心に検討してみた。本稿での検討が十分だったとは言えないが、ある論理、主張を社会に普及するためには、社会の仕組みである社会システムを理解する必要があることは説明できたのではないだろうか。“彼を知り己を知れば百戦殆からず”という言葉があるように、社会システムを具体的に理解することで、新しい論理、価値を社会に普及する際の限界とヒントが明らかにできるといえよう。

参考文献

- 大澤真幸, 2019, 『社会学史』, 講談社現代新書
金二城, 2024, “日本の伝統環境思想研究の示唆点—江戸時代を中心に”, 韓国環境哲学学会, 37, pp.37~64
ソボク, 2023, 『東洋的価値とはなにか』, 知識マダン
富永健一, 1990, 『日本の近代化と社会変動: テュービンゲン講義』, 講談社学術文庫
富永健一, 1995, 『行為と社会システムの理論: 構造—機能—変動理論をめざして』, 東京大学出版社

3. SDGs 研究センター報告

SDGs 研究センター長 藤 公晴

総括

今年度の SDGs 研究センターの活動を振り返ると、着地と定着をより意識した一年となった。

新潟再生プロジェクトは、第2フェーズの開始年度でこれまでの総研だよりで報告したとおり、ソフトウェア情報学部の下條ゼミと総合経営学部の後藤欣司ゼミの参画、KDDI 財団の協賛により、より多くの教員、研究者、八甲田山系の関係者による参加、厳冬期を含む多様な活動展開になった。また、Web サイトの構築や新潟憲章の制定など普及啓発の側面においても進展があり、より頻繁で綿密な活動内容による公益性の発揮に向けた第1歩となる年であった。

前回の総研だよりの刊行後の主な活動は以下の通りである。

10/18 Starlink の新潟での動作確認（ポータブル電源利用）

11/2 大学祭で、太陽光パネル+ポータブル電源による Starlink 動作確認と学生による報告会の実施

2/6 厳冬期の現地接続実証、ガイド、学生、研究者の参加、ディスカッション

3/11 学内外の関係者対象オンライン報告会（環境省、酸ヶ湯温泉、地元女性ガイド、日本技術士会、教職員、研究者、学生など）

本プロジェクトは、自然環境、施設、機材、利害関係者、予算、天候、参加学生、学習内容など、不可測な側面が多く動的である。こうした流動性を踏まえながら、トライアンドエラーのみならず、より綿密な評価や調整・修正をほどこす適応型管理と運営を関係者とともに心がけたい。

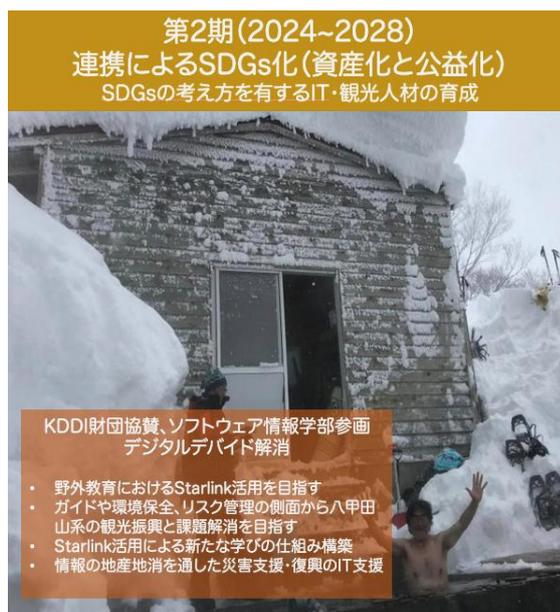


図1 新潟再生プロジェクト第2期の骨子



図2 厳冬期のモバイルバッテリーによる Starlink 接続実証

Harrow International School Appi におけるイグルー制作プログラムについては、2022 年度から同校の厳冬期の野外教育の一環として、佐々木豊志副センター長を中心にイグルー制作プログラムを実施してきており、今年で3年目になる。

同校は、450 年にわたり質の高い、Values-based Education (価値教育) を提供しており、同校の教育実践は、わたしたち青森大学の教員にとっても貴重な研鑽の機会でもある。そして今回、国際化や英語教育、野外教育の観点から、青森学術文化振興財団助成「青い森ローカル SDGs のシナリオ創出に関する調査研究③事業」の一環として、初めて総合経営学部と社会学部の学生 6 名にイグルー制作の指導補助を経験させる機会を設けた。とくに今年度のプログラムでは、同校の寮が6つに増え、昨年度までの形式と異なり、3日間通して6基制作し、のべで180名以上の生徒が参加し、寮ごとに制作プロセスと完成のレベルを競い合う形式で実施した。

日時：1/24 (金) ~26 (日) 3日間 9:00 本学出発、18:00 本学到着

場所：ハロウインターナショナルスクール安比

対象：同校生徒約180名

担当教員：佐々木豊志、後藤欣司、藤 公晴

参加学生：社会学部2年 崎原 盛雅、水尻 隼太、社会学部4年小川 太勢、総合経営学部2年 鈴木 健龍、総合経営学部3年 松山 岳史、池田 修真
参加した学生6名は、各寮のグループに入り、イグルーマイスターの補助の役を担った。

紙面も限られていることから、参加後に実施したアンケート結果の一部を以下で共有する。



図3 イグルー完成後の寮ごとの発表の様子

1. Harrow の教育の一環としてイグルー制作を寮ごとに競い合うプログラムに関する感想や考え (抜粋)

・競い合うことで競争意識が生まれ、生徒たちがイグルー制作に真剣に意欲的に取り組めると感じた。また、他の寮により良いイグルーを作ろうとそれぞれの寮で創意工夫されており、それぞれの寮の特色が現れたイグルーが作られていた。(原文ママ)

・寮ごとに競い合うことで、他のチームに負けたくないという競争心などがあると思いました。その競争心からチームの団結力やより良い物を作ろうとする気持ちなどもあると思うので良かったです。また、寮ごとに競い合う事は今回のイグルーだけではなく、他のイベントでもやっていると聞きました。日頃から同じチームの子と過ごす事で親しい関係で物事を進める事が出来良いと思いました。(原文ママ)

・寮ごとに競わせることで、寮内でのコミュニケーションが盛んになっており、上級生が低学年に対してリーダーシップをとっていて、教育的なプログラムとして良いものだと感じた。また、自分の成長として、言葉の通じないなかコミュニケーションをどう取るかを考えるいい機会になったと感じた。

2. 今回の指導補助としてのプログラム参加を踏まえて、青森大学の教育の質向上や次世代の若者育成についての提案やコメント（抜粋）

- ・他校の初対面の生徒と英語でコミュニケーションをしながら共同作業をすることは、互いに刺激になり良いことだと思う。今回のイグループログラムでは、イグルーを作る技術や知識を持っている大学生が少ないと感じた。このプログラムは楽しく、コミュニケーション能力の向上や協力の大切さを学ぶことができる。このことを宣伝すると、イグルーについて学ぶ学生が増えると思う。
- ・授業の中でもチームで活動するという事を増やす事で、意見交換になるので新しい発見も増え良いと思います。また、授業ごとに簡易的な発表があると真面目にやらないといけない場面が増えるため追加しても良いと思いました。素晴らしい。インターンシップとしてインターナショナルスクールに参加してみたい。
- ・長期で宿泊を伴う程度の強度があるプログラムであると顕著に学生の心境の変化が見られる。1コマ参加する体験だけでは得られない達成感が得られると感じた。また、学生が指導するティーチングであったり言語が違ったりするなどレベルを分けて教員希望者、観光事業者、チームビルディングなどいろいろなカテゴリーで利用できる。

学生を指導補助として参画させることによって、次のようなメリットがあった。一つ目は、年齢が生徒に近い分、生徒たちが抱く親近感も高く、コミュニケーションの円滑化につながった点が挙げられ、それがイグルー制作にかかる労働面のみならず、コミュニケーション面の効率性を向上させた。それらに加えて、上述の各コメントで挙げられた通り、学生の向学心や意

欲の向上にもつながり、プログラムの質全体の相乗効果につながったと言える。

最後に、3月21日に実施したSDGs研究センター活動報告・交流会「地域の自然の再評価に向けた人づくり、大学の役割」を報告する。

日時：3月21日（金）15:00~16:30(報告会), 16:30~17:45(交流会)

会場：ねぶたの家 W・ラッセ 2階 多目的室(2)

形式：ハイブリッド形式（対面・オンライン併用）

司会：横岡 美和（社2年）

挨拶：柏谷 至（総研副所長、社会学部）

概要説明「ウェディングケーキモデル、モード1と2のSDGs」:

藤（センター長、社会学部）

報告①「教育の再考、体験学習・冒険教育の位置づけ：新潟再生プロジェクトと株式会社サンデーとの連携プロジェクト」佐々木豊志（副センター長、観光文化研究センター長、総合経営学部）

報告②「津軽地方の自然・歴史に関する調査・活動報告」

竹内健悟 客員教授

解説・まとめ「実践的枠組みと教育の質改革、研究分野との関連づけ」藤

交流会：青森大学三味線部 あおしゃみ ミニ演奏会

当日は、島根県や愛媛県などからのオンライン参加を含めて、予想を上回る40名強が参加し、盛況だった。

参加者からは次年度の実施と、地域還元という観点でのさらなる情報発信の希望・提案もあり、大きな励みになった。



図4 青しゃみ演奏の様子

この場を借りて、今回の企画準備から実施に向けて協力支援してくださった全ての方々にお礼を申し上げます。

今年度の要点

これまでの総研だよりでは触れてこなかったが、「SDGs」や「脱炭素」といった専門用語の使い方、位置づけ方について述べておきたい。新湯再生プロジェクトや Harrow International School Appi の教育支援など、SDGs 研究センターの活動の大半は、SDGs を明示的に位置づけでならず、暗示的な扱いにしてきた。

SDGs とは、いかなれば地球規模の課題の解決を目的に、2015 年を境に国際政治のプロセスで出された政策遂行上の抽象的な用語・仕組みである。その経緯や仕組み、17 項目 169 目標との関連性は、インターネットや AI で入手可能な記述的な情報である上、説明する時間も要する。また、受益者は、SDGs という日常の暮らしからかけ離れた抽象的で包括的な概念を、各自の暮らしに変換・応用する手間を要するため、いわば不便さが伴う概念でもある。SDGs を扱う側に立つ者は、そのような SDGs の特質を留意しつつ、日常生活に直結する、具体的なことがらを体験する機会提供の方が、変革・変容に向けたコミュニケーションという観点で効率的でなかるか。例えば、おから味噌づくりやねぶたうちわづくり、新湯再生プロジェクトへの参加には、身体性をともなう創作プロセスに、他者とともに関わることで、集団的な記憶の形成にもつながる。また、自然環境や文化との関係性についての体験的理解の醸成にも資することはいうまでもない。このような暗示的な取り組みを筆者はモード 2 の SDGs として捉えている。

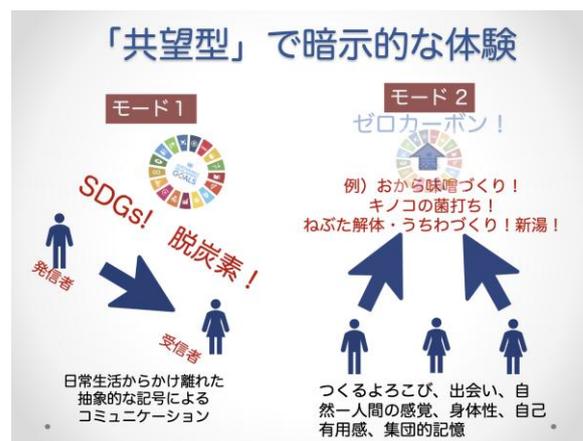


図4 モード1と2の取り組みの違い

モード 2 の捉え方は SDGs の汎用性に対するわたしたちの認識を耕してくれるのではなからうか。たとえば、三沢市を拠点にエネルギーの地産地消を目指し、青森県南地域の杉のみを原料にしたペレット製造販売や、破棄予定のイベント用口ウソクを収集し、福祉作業所との協働でアップサイクル着火剤の製造販売に取り組む株式会社高橋 HD、夏泊半島の北端に位置する大島で地理、信仰、環境、景観の観点から海洋漂着物収集に取り組む BLUE PEACE、地域固有の在来種の栽培・普及にこだわる生産者など、SDGs という用語との明示的な関連づけにこだわらず、独創性や意匠、社会性、エコにこだわる試みがわたしたちの身の回りに、そして SDGs が打ち出される以前にも大小多数ある。SDGs の「誰一人取り残さない」という誓いを踏まえると、用語やバッチの有無や時期に囚われすぎず、さまざまな試みの創造性や社会への配慮といった実相を注視し、高潔さをイメージする姿勢こそ、SDGs 時代に生きるわたしたちが身につけたい素養だと考えている。

4. 2024 年度 比較環境思想研究センター 報告

比較環境思想研究センター長 関 智子

1. はじめに

比較環境思想研究会は 2022 年度より本学にて発足し、2023 年度に比較環境思想研究センターとなり、本学総合研究所に配置された。本年度は 3 年目の活動となる。これまでの 3 年間で計 15 回の研究会を重ねることができ、ご講演いただきました方、ご参加いただきました方、また本会の運営・サポートにご協力いただきました方々に、心よりお礼申し上げます。

環境思想は自然と人間の関係性について深く考察することに始まり、地球と人類のあり方について、また過去、現在、未来を見通すことから叡智を創造しようとする営みともいえる。あらゆる人にとって意識的、無意識的に関係しているテーマである一方で、日本においては研究分野として発展途上にあり、この意味から議論の場が充実しているとは言えない状況である。このため本センターは環境思想をテーマに、風土や政治、文化的背景が異なる国や地域との相互研究と交流も視野に入れて運営を行っている。

3 年目となる 2024 年度は、古来、日本が多大な影響を受けている中国・韓国の伝統的環境思想をメインテーマとし、4 回の研究会を実施した。また今年度最終の研究会では、議論の前提となる「自然」の意味、範囲、定義、法則について、宇宙物理学の研究を専門とする本学ソフトウェア情報学部の大川博督氏（准教授）からのご講義をいただいた。

以下に 2024 年度研究会の概要を報告する。

2. 中国・韓国の伝統的環境思想から宇宙物理まで

日本思想のルーツを遡る時、近世は「宗教はじめ政治や経済など、人間の活動のあらゆる領域が世俗生活の側面から価値づけられるようになる」¹⁾時代である

と示唆されていることから、この時代の古典思想を読み直すことは日本人の根源的な価値観を理解する上で有益である。そしてこれらの中に中国・韓国の影響がどのように現されているのかについて認識し直すことも、互いの深い歴史的つながりを知る上で重要であろう。第 1 回から第 4 回研究会では、近世の環境思想的側面の基盤に、中国・韓国の伝統的環境思想の要素が色濃く影響していることを感じとることができた^{2) 3) 4)}。さらに両国の伝統的環境思想は現代社会の中で様々な姿かたちとなって表現され、息づいていることがわかった。

ところで、これらの講義や議論の中で頻繁に使われた「自然」「天」「地」といった概念が具体的に何を示すのか、科学が発達した現代ではより明確な解釈が必要であることが問われた。第 5 回研究会では環境思想からあえて離れ、科学分野からどのように解釈されているか（あるいは解釈されてきたのか）についてお話いただいた。哲学と科学はその起源とは異なり、今では両者が離れすぎてしまい、交わることが難しくなってしまったとも言われるが、この課題をクリアするのは案外、人々の日々の柔軟な思考にヒントがあるのかもしれない、と感じた。自然と人間の関係の考察がそのきっかけの一つとなることに期待したい。

中国環境思想の研究会では本学特任教授の陳化北氏、韓国環境思想の研究会では同教授の金二城氏に運営上のサポートをいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

1) 研究会概要

◇ 第 1 回研究会 ※韓国より配信

テーマ：韓国近代のエコロジー思想：崔時享の東

学思想を中心に

ゲスト講師：趙 晟桓 氏（韓国 圓光大学校
東北アジア人文社会研究所）

日時：2024年6月13日（木）

16時30分～18時30分

場所：青森大学東京キャンパス（配信あり）

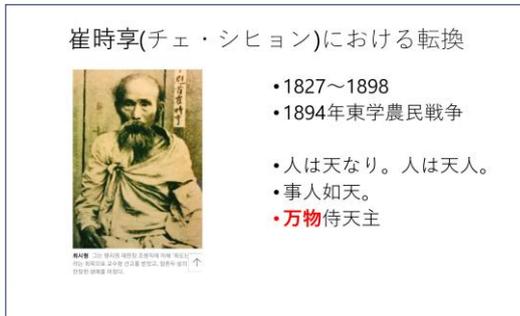


図1 趙晟桓氏 講演スライドより

◇ 第2回研究会

テーマ：先秦道家：老子・荘子の生態環境思想に
ついて

ゲスト講師：陳 化北 氏（青森大学特任教授）

日時：2024年7月18日（木）

16時30分～18時30分

場所：青森大学東京キャンパス（配信あり）

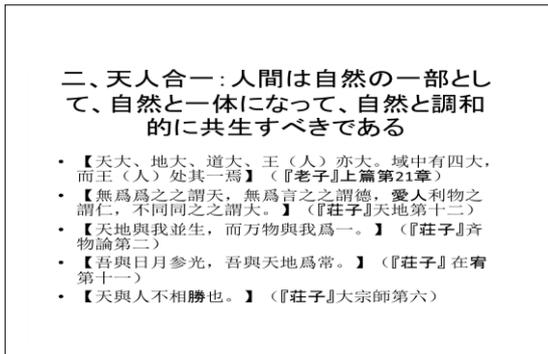


図2 陳化北氏 講演スライドより

◇第3回研究会 ※韓国より配信

テーマ：近代韓国における環境思想の形成とその
実践について：東学の成立（1860）から<ハンサ
リム宣言>（1989）、そして<ハンサリム宣言再
読>（2010）まで ※韓国より配信

ゲスト講師：朴 孟洙 氏（韓国 圓光大学元学長、
名誉教授）

日時：2024年9月25日（水）

16時30分～18時30分

場所：青森大学東京キャンパス（配信あり）



図3 朴孟洙氏 発表レジюмеより

◇第4回研究会

テーマ：天地人の「リンク」：共有と実践

ゲスト講師：王 敏 氏（法政大学名誉教授）

日時：2024年11月6日（水）

16時30分～18時30分

場所：青森大学東京キャンパス（配信あり）



図4 王敏氏 講演スライドより

◇第5回研究会

テーマ：「宇宙」のち「自然」、ときどき「法則」

ゲスト講師：大川 博督 氏（青森大学准教授）

日時：2025年2月27日（木）

16時30分～18時30分

場所：青森大学東京キャンパス（配信あり）



図5 大川博督氏 講演スライドより

2) ゲスト講師の代表的な著作について

◇趙 晟桓 氏

『韓国近代の誕生——開化から開闢へ』図書出版、モシアンサラムドゥル (모시는 사람들)、2018年。(ハングル)

◇陳 化北 氏

「安藤昌益の国家民族観について」(『アジア文化研究』第二号、2016年、19-38頁)。

◇朴 孟洙 氏

『新版 東学農民戦争と日本——もう一つの日清戦争』高文研、2024年。

◇王 敏 氏

『宮沢賢治と中国』国際言語文化振興財団、2002年。

◇大川 博督 氏

Hiro tada Okawa, et al. “The W4 method: A new multi-dimensional root-finding scheme for nonlinear systems of equations.” *Applied Numerical Mathematics*, Vol.183 Jan., 2023, 157-172.

3. 詳細内容の公開について

比較環境思想研究センターは、過去3年間にわたる研究会の講義およびディスカッションの内容について、順次ウェブサイトに掲載していく予定である。スケジュールや公開の方法等については、次へお問い合わせください。

関 智子 (比較環境思想研究センター長)

メールアドレス : tseki@aomori-u.ac.jp

引用・参考文献

- 1) 田尻祐一郎「Ⅲ 近世の思想：概説」(佐藤弘夫編集委員会代表『概説日本思想史』、ミネルヴァ書房、2005年、136頁)。
- 2) 佐久間正『徳川日本の思想形成と儒教』(ペリカン社、2007年、547頁)。
- 3) 関智子・進士五十八「熊沢蕃山の環境保全論が岡山藩における山林保護政策に与えた影響について」(『ランドスケープ研究』、2009年、72巻5号、777-780頁)。
- 4) 関智子「蕃山・梅岩・昌益にみる日本型環境思想の原型：環境教育の基盤としての可能性」(『環境教育』、2013年、23巻2号、67-78頁)。

5. 実施報告：Café 総研

付属総合研究所 紀要編集委員会

1. 12月 café 総研

話題提供：熊谷芳子（社会学部）

話題：オンラインを活用した自助グループ活動の
定着プロセスについて

日時：令和6年12月17日（火）16:20～
17:30

場所：総合研究所会議室／オンライン（Zoom）

café 総研は、本学研究者がお互いの研究内容等について情報交換を行う場を提供することを目的に開催していますが、今年度第7回目となる12月の会では、赴任2年目になる社会学部の熊谷教員に登壇して頂き、提出したばかりの修士論文に基づき、ご報告頂きました。

アルコール依存症からの回復には断酒会やAAなどの自助グループに有効性があること、そして、この社会資源には地域差があることはよく知られている。また、コロナ禍における諸活動のオンライン化は、コロナ禍以降も継続し、この形態が定着している自助グループもある。こうした状況下、熊谷教員は、地域における社会資源の偏在に対して、自助グループのオンライン活動は効果的に機能していくのではないかと、という問いを立て、その確証可能性を、青森県をフィールドにして探っていきます。

東北地方ならびに青森県におけるアルコール依存症関連の特質として、まずは成人一人当たりの酒類販売（消費）数量が全国第3位であること、そして、飲酒習慣が地域に根差しており飲酒に寛容な文化であること、その文化には狭く封建的な「ムラ」社会と多世代同居率の高さに窺えるような閉塞的な性質という特徴があること、加えて、専門医療機関や社会資源全般が少なく、さらには広い土地と交通機関の脆弱性からくるアクセス上の困難が横たわっていることが列挙されている。

これらが組み合わさって、依存症のような問題の解決を阻んでいると一般に言われている。

また、一般に、アルコール依存症治療の三本柱としては、アカンプロサート、シアナミド等の抗酒剤、専門医療機関（青森県では、生協さくら病院・藤代健生病院・青南病院がこれにあたる）、そして、AA、断酒会などの自助グループがある。なお、オンライン療法として、よく知られているオンライン集団精神療法においては、遠隔セラピーは対面セラピーの「補助」ではなく、別の種類のものでされており、オンラインでの関係性は大グループで発達していく類の親密性に比較的類似しており、複合性及び所属感に基づいているとされている。また、個々の自助グループがオンラインを導入する際には、その詳細において個別にルールを導入している。これらのことにも注意して分析する必要があると熊谷教員は説く。

以上をふまえて、熊谷教員は経験的調査を行なった。2023年8月から2024年1月にかけて、青森県で活動していた自助グループのメンバーに半構造化インタビューを実施した。その際、①オンラインミーティングを導入または参加した経緯、②オンラインミーティングのメリット・デメリット、③今後のオンラインミーティングについて、④地域の関係者に対して言いたいこと、をインタビューガイドとした。

修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による分析については割愛する。結果として、コロナ禍により急速に広まったオンラインを活用した自助グループ活動により、交流が発達し、全国規模のつながりが生まれ、活動は定着していた。しかしながら、オンラインのみの活動では不十分であり、直接的交流や個別での交流

が、オンラインの活動を支えていた、ということが確認できた。

また、今後の展望としては、依存症治療の3本柱を有機的に作動させるべく、医療福祉専門職及び自助グループが協働して依存症の支援を行っていくネットワークを構築することの有効性が説かれていた。そして、その際には、青森県の地域性を生かすことでより有効性が高まるということであった。

ディスカッションにおいては、将来、医療専門職への従事が見込まれる薬学部の教員と熊谷教員との意見交換などがなされた。報告者の医療社会学・人類学の知見からすれば、医師側と自助グループ側の間には、disease と illness の差異に見いだされるような、長きに渡る行き違いとその埋め合わせの歴史がある。本 café の試みが、上記のような、協働支援のネットワーク構築に貢献することを願ってやまない。

2. 1月 café 総研

話題提供：白川義和（総合経営学部）

話題：「北朝鮮の核開発とアメリカの強制外交」

日時：令和6年1月29日（水）16:20～17:30

場所：総合研究所会議室／オンライン（Zoom）

今年度第8回目となる1月の会では、35年にわたり新聞記者を務め、韓国やアメリカで取材をされてきた総合経営学部の白川教員に登壇して頂き、上記の話題にて、ご報告頂きました。

白川教員の掲げる問いは、「なぜアメリカは北朝鮮の核開発を止められないのか。どうすれば止められるのか」という、現在も西側諸国にとって喫緊の課題であり続けるものである。これに対して、1 核兵器を持つとする側の動機、2 核開発を阻止するための政策手段、3 非核化を達成するための合意内容という3つの論点に分けて論じていく。

1 核兵器を持つとする側の動機

まず、核兵器を持つとする側の動機だが、これは3点指摘される。第1に、経済的利益のためである。「瀬戸際戦術」で危機を高めて、核放棄の見返りに経済制裁解除や支援を得ようとするものであり、例えば、1994年の「米朝枠組み合意」が挙げられる。つづいて、第2に、国内政治体制の強化のためである。「核強国」を国内に宣伝し、例えば、国民の様々な犠牲を容易にするだろう。そして、第3に、当然のことながら、対外抑止力の確保のためであろう。それは、若干であれ、アメリカからの攻撃をある程度、思いとどまらせることにつながることもあるかもしれない。なお、北朝鮮の弾道ミサイル発射数・核実験回数は飛躍的に増大しており、1994年～2011年の金正日時代は16発・2回であったのに対して、2012年～現在（2024年3月）の金正恩時代は179発・4回である。

2 核開発を阻止するための政策手段

次に、核開発を阻止するための政策手段であるが、これは、軍事オプション——核施設を空爆し、核開発能力を除去する——あるいは、強制外交——軍事力使用の威嚇や経済制裁の圧力をかけることで、外交交渉に持ち込み、核放棄を強要する——のいずれか、ということになる。

核開発を放棄させた例としては、2004年のカダフィ政権時代のリビアに対して、アメリカとイギリスが原油禁輸などの制裁を科して制裁解除の見返りに核開発を放棄させたものが有名であり、「リビア・モデル」と呼ばれる。また、2015年アメリカを中心に原油禁輸や金融制裁をイランに科し、制裁解除の見返りに核開発を停止させたイラン核合意を挙げるができる（この合意はオバマ政権時代に実現するものの、第一次トランプ政権が破棄している。）

こうした成功例があるにも関わらず、なぜ北朝鮮への制裁は機能しないのだろうか。主要な原因は二つあり、一つには、北朝鮮の最大の貿易相手国である中国が制裁の「抜け穴」となっているから

であり、今一つは、アメリカと中国、ロシアの関係悪化により、経済制裁の強化や制裁履行の監視を担う国連安全保障理事会が機能不全に陥っているからである。

では、実効性のある非核化合意をつくれるのだろうか。過去になされた合意——米朝枠組み合意(1994年)、6か国協議共同声明(2005年)、米朝首脳シンガポール合意(2018年)などがうまく作動せずに現在に至ったことを鑑みれば、合意の課題は第一に、核施設・核物質の正確な把握と廃棄プロセスの実効性、第二に、北朝鮮への「安心供

与」(=体制の保証)の実効性にあると言える、と白川教員はまとめている。

本テーマは、日本の安全保障問題を考える上で避けては通れない問題であるがゆえに、ディスカッションにおいては、外交問題の非専門家たちによる様々な意見が表明された。また、拉致問題への言及もしばしばなされた。それらに対して、一つ一つ丁寧に白川教員が応じていたことに記して感謝し、本テーマにおける諸課題の現実的な解決への見通しが良くなることを願ってやまない。

◇総研日誌（2025年1月1日～3月31日）

▽1月15日（水）

・第8回運営会議

▽1月29日（水）

・第8回Café総研

▽2月13日（水）

・第9回運営会議

▽2月25日（火）

・青森大学附属総合研究所特別講演

中村公英氏「青森歴史こぼればなし～昭和青森
を生き抜いた男達（第3弾） 元青森市長
佐々木誠造とその時代」

（青森市男女共同参画プラザ・カダール）

▽2月27日（木）

・比較環境思想研究センター・第5回研究会

▽3月11日（火）

・SDGs研究センター・新湯再生プロジェクト
報告会

▽3月21日（金）

・SDGs研究センター活動報告・交流会「地域の自然の再評価に向けた人づくり、大学の役割」

（青森市の文化観光交流施設ワ・ラッセ）

▽3月13日（水）

・第10回運営会議

◇編集後記

年明けから3カ月、またしても「激動」の文字がいくつも頭に浮かんでいきます。身近なところでは、青森市や弘前市がまたも歴史的豪雪に見舞われました。年末から年始にかけて、時期外れの重い、湿った雪が降り続き、除雪中の事故などで多くの方が亡くなったり、けがをしたり、多くの建物が倒壊したりしました。テレビの全国ニュースでも連日、トップの扱いとなり、各地の人たちから「青森は大丈夫か？」と安否を気遣う声が届きました。

その後、降雪自体は平年並みに推移したものの、早い時期のドカ雪が社会や経済、農業に及ぼしたダメージは大きく、「振幅が激しさを増す自然現象とともに生きる」ことについて、あらためて考えさせられた冬になりました。気候温暖化のためか、大気現象そのものが予測困難になりつつあると同

時に、人間社会も複雑さが増し、さらには各種インフラの老朽化や地域の人口減少・高齢化と相まって、考慮しなければならない「変数」が飛躍的に増えている印象です。

加えてーやや話が飛びますがーアメリカ・トランプ政権によるさまざまな変革が、さまざまな科学のインフラに世界的な影響を及ぼしているのでは、という懸念も急浮上しています。

21世紀を迎え、早くも四半世紀が過ぎようとしています。青森大学も4月から、新たなステージを迎えます。何とか、学生の皆さんや地域の皆さんと手を携え、明日を切り開いていかななくては…！

（素）